

子どもたちが学び合いを意識する楽しい授業づくり

—小学校の体育科の授業実践を中心に—

教職実践基礎領域

竹内 康晃

I はじめに

大学院一年時の9月から連携協力校である小学校において、約1年半の期間、サポーター活動と教師力向上実習Ⅰ・Ⅱをさせていただいた。昨年度は1～6年生の各学級におよそ一ヶ月毎に配属させて頂き、全ての学年に携わることができた。今年度は4年生を中心に配属させて頂き、経年の変化を追うことができた。配属させて頂く中で、教科指導、学級経営、生活指導、部活動指導、行事の運営などについて、実践的に数多くのことを学ぶことができた。

本稿では、「授業づくり」に焦点を当て、「子どもたちが学び合いを意識する楽しい授業づくり —小学校の体育科の授業実践を中心に—」をテーマとして、本実践研究において取り組んだ成果と課題を報告する。なお、体育と道徳の授業実践を中心に報告する。

II 主題設定の理由

1 今日的な教育課題

文部科学省が昭和39年から実施している体力・運動能力調査によると、子どもの体力・運動能力は、昭和60年頃から長期的な低下傾向が続いている。現在の子どもの調査結果を親の世代(30年前)と比較すると、ほとんどの項目で、子どもの世代が親の世代を下まわっている。

私が大学院一年時に関わった、連携協力校の一年生、二年生の体育の授業や生活の授業では、昔ながらの伝承遊びや、鉄棒、マット運動などを実態に応じて実践し、運動することの楽しさを伝えていくように指導をしている。そこに参加している子どもたちの運動している姿を見ていると、つまずいて転倒した際に手をつかずに顔面を強打したり、蹴ったボールを取りに行こうとして目の前の鉄棒に気がつかず頭を強く打ったり、キャッチボールをしてボールを顔で受けたりして様々な怪我をするなど、危険を回避することが苦手であり、事故や怪我をすることが多々ある。また、運動会の練習中に倒れる、靴のヒモが結べない、スキップができない、リズムに合わせて体を動かすことができないなど、自分の体を思い通りに動かせない子どもが増加していることも現実であると感じた。体力・運動能力の低下は、単に運動能力の低下や日常生活において怪我をしやすくなるといった問題だけではなく、肥満や生活習慣病などの健康面、更には意欲や気力といった精神面などにも悪影響を及ぼす。このように、子どもの体力・運動能力の低下は、早急な対策が求められ

る深刻な問題である。この問題を解決するためにも体育の授業の改善や指導の模索は必要不可欠である。これらの力を教師が手本となり指導していくことはとても大切なことである。発達の段階に応じてその手法は異なり、学級の実態によって変えていかなければならないことでもある。基礎の基礎から丁寧に指導していき、教師が思い描いた理想にいかにな近づけていくか。また、正しい形や美しさを追究しよりよい姿を決め、子どもたちと和して進んでいくことも一つの学びであるだろう。しかし、私は教え込むのではなく、子どもたち自らが気づくことにより、確実な理解へと変わり、そして持続し心に残る活動になると考えている。一人で気づくことも大切なことの一つである。しかし、それには限界がある。であるからこそ、グループで教えあうこと、仲間同士が関わり、支え合い、学び合うことが必要なのである。子どもたち同士が助言、アドバイスを繰り返すことで、より質の高い学習効果を得ることができるのではないかと考えた。

2 児童の実態から

サポーター活動及び教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを行ったA小学校の児童は、明るく元気で授業・休み時間も活発である。できることや得意なことに対して積極的に、笑顔で取り組む姿や仲間や教師に対してアピールする姿が目立つ。その一方で、できないことや苦手なことに対して消極的になってしまう姿が見受けられる。生活面では、忘れ物をたびたびしてしまう児童や、一度指導されたことを幾度となく繰り返してしまい、再び指導の対象となってしまう児童が多くいる。学習面では多くの授業で他の児童が言った意見に対し、自分の意見が異なっても、なかなか自分の意見に自信を持って発言できる児童は少なく、不正解や失敗をおそれているように感じる。その中で、体育の授業では、集団で行うチームスポーツや球技で苦手な動作があることを悲観的に感じている児童が多く、授業への取り組みが消極的になっている児童がいるように感じた。また、体育の授業に対し、自分自身の活動をじっくりと振り返る時間を確保できず、成長を実感できずにいる児童がいることを感じた。

上記のことから、生活面の実践として、学級での週目標に対し、振り返ることを継続的に行う。日頃から振り返ることを行うことで、日々の成長を感じることができると考えた。道徳の実践では、進んで自らの考え方や気持ちを発信していく実践を行い、互いを認め

合うことができる学級づくりを実践していく。これらを踏まえて、体育の実践ではチームボードや学習シートを活用し、学び合いや自己反省ができる工夫を行った。また、子どもたち自身が主体的に活動し、楽しいと感じる授業を展開していく。

3 目指す児童像

今日的な教育課題と連携協力校の児童の実態から目指す児童像を以下のように設定することにした。

◎積極的に授業に参加し、仲間との学び合いを通して努力できる児童

目指す児童像を達成するための指導として、体育の授業では作戦タイム、学習シートを活用し、児童一人ひとりの考え方や気持ちを言い合ったり、記録として残したりすることができる活動を設ける。その中で、体を動かすことだけではなく頭を使うことも話し合いを通して行い、チームスポーツとして仲間と協力して活動することが学び合いに繋がり、価値あることだと実感できる工夫を行う。作戦タイムでは、互いの意見を出し合い攻撃の仕方や守備の仕方を話し合うことで互いを認め合うことができ、学習シートを用いて一人ひとりが毎時間に書き込むことで振り返ることができ、自らの成長を再確認できると考えた。また、その学習シートには、今日の学び合い MVP やその理由を明記できる欄を設けた。子どもたち一人ひとりが授業後に書き込むことを意識するため、自然に仲間と学び合う場面を意識するようになり、積極的に授業参加できるようになると考えた。そして、学習意欲を高める工夫として、「ゲーム性」をもたせて取り混ぜせ、より楽しく授業に取り組めるようにさせる。導入に簡単なアクティビティを行い、主運動の基となる動きを遊び感覚で体得させる。この活動を毎時間に少しずつ変化を伴わせて行うことで、体を動かすことは楽しいと感じてもらえると考えた。具体的には、球技の運動であれば、ただ投げたり捕ったりするだけではなく、回数を競ったり障害物を置いたりするなど、マナー化させない工夫をしていく。ゲーム性をもたせることによって、楽しく取り組めることはもちろんのこと、仲間との交流や練習の質を高め、技能の向上にもつながっていくと考えた。

III 研究の構想

1 学び合いの有用性

なぜ学び合いなのか。私は、体育の時間を利用して「子どもたちが学び合いを意識する楽しい授業づくり—小学校の体育科の授業実践を中心に—」の教育実践を研究していきたい。学び合いを実施するには、子どもであっても大人であっても一人の力では行うことはできない。小学校の授業では、学習者である子どものみならず、学級の仲間や教師がいる。私は、仲間や教師と関わりながら、能動的に学習を進めていくこ

とで学び合いが成立すると考えている。

学び合いに関して、西川純(2012)は、「子ども同士の方が、互いにどう説明すればいいのか分かっているので、飛躍的に学力が向上する」と述べている。このことから、同程度の学力の者同士が学び合おうとすることは「自分もできる」と感じやすく、自分から進んで学習するようになるのではないかと考えた。学級の仲間がそれぞれの課題を解決していく様子を見ることや感じることで、「自分にもできるかもしれない」という体育科における「統制感」を駆り立てることができ、学習に前向きに取り組むことができると考えている。

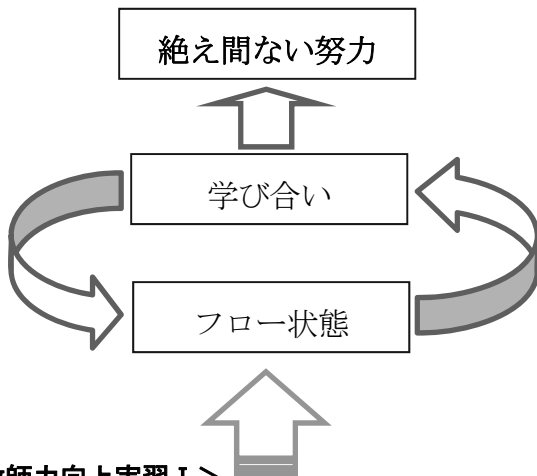
そこで教師力向上実習Ⅰでは、「学級づくり」の側面から、子どもたちに学び合いの大切さや重要さに気付いてもらうことができるよう努めた。具体的には、道徳の時間で仲間の意見に対して、考え方をしっかりと受け入れた上で、自らの意見を発信する実践を行う。また、振り返る力を養うため、毎日の自分の活動を見返す時間を一日の終わりにとり、書き込む実践を行う。これらを通して、自分の行動や発言に責任と自信を持つことができ、自尊感情の向上を図ることができると考えた。仲間のよいところを見つけ、それを全員で讃えることで讃えられた側は自己を肯定する力を養い、同時に讃えた側は仲間のよさを認めることができる力を養うことができると考えている。

教師力向上実習Ⅱでは、「授業づくり」の側面から、教師力向上実習Ⅰで学んだことの成果や課題を基に特に体育の授業に力を注いだ。体育授業においてチームプレーを行う競技や個人種目においても学び合うことができるような場を設定した。そのためにグループやペア活動をうまく活用していく。誰もが主体的に仲間と関わりながら、互いの姿を見合い、考え方を共有できるように努めた。そのために、授業の中に毎授業でどこに着目するのか、何に注目して取り組むのかの課題提示を明確に行っていく。また、児童同士の関わりが活発になるように互いの課題への視点を共有できるようにしておく。

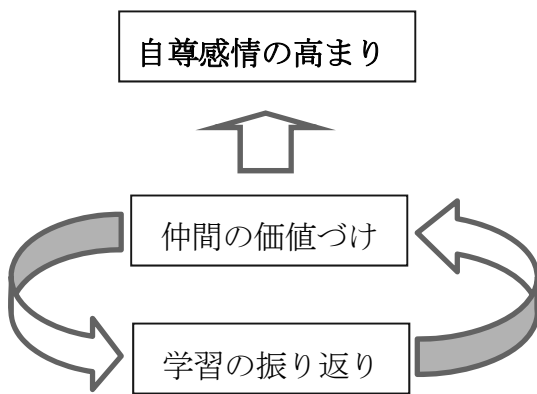
より多くの子どもたちに体育の授業が楽しいものであること実感してもらい、生涯にとって価値のある学びであることを少しでも感じてもらうことができるような授業を展開していく。本研究では、教師力向上実習Ⅰ、教師力向上実習Ⅱの二か月間を通して長期的なスパンでねらいに迫っていく。教師力向上実習Ⅰでは、「学習や生活に対し振り返る力養う→自分の活動が教師や仲間から認められる→自尊感情が高まる」そして、その連続した展開を維持したまま教師力向上実習Ⅱでは、「仲間との関わり合いを密にする→意欲が向上しフロー状態→絶え間ない努力…」のように自尊感情の向上を基に、学び合いの質を高めた上で体育

の実践を行うことで、児童が自らの成長をより実感し学習に意欲的に取り組む。また、授業に対して「もっとやりたい」「うまくなりたい」という努力を惜しまない姿勢を目指す。

＜教師力向上実習Ⅱ＞



＜教師力向上実習Ⅰ＞



【図1 教師力向上実習の繋がり】

2 先行研究

(1) 体育科における学び合うことへの関心・意欲を育てる指導の基本的な考え方

私は連携協力校の現状も踏まえ、自ら考え、行動し、認め合う児童の育成について研究していく。これらを私の専門教科である保健体育科を通して授業実践を主に行った。また、道徳の授業も活用し、必要なスキルを高めることも行った。理論研究を進めていくにあたり「運動有能感」と「自己肯定意識」と「Action Socialization Experience(社会性を育成する実際体験)」の三つについて触れておきたい。

「運動有能感」

岡沢ら(1996)は、「内発的動機付けを高めるためには、内的な自己認知としての運動有能感を高めることが効果的であり、有能感は三つの因子「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」で構成されている」と述べている。その運動有能感を高める小学校の授業の授業実践は多様にあることが先行研究から明らかになった。それらの多くの報告から、運動有能感を高め

るためには、体育授業の経験の違いよりは、体育授業の内容やねらいという質的な経験の違いの方が、より影響することが明確となっている。また、杉原(2011)は「体育授業でどのような経験をしたかが運動やスポーツの継続に影響を及ぼす」と述べている。そのため、体育授業の経験が運動における有能感に大きく影響を及ぼしていることが考えられる。内発的な動機付けを生じさせる運動有能感の視点から検討することで子どもたちの豊かなスポーツライフをねらいとした指導上の示唆が得られるのではないかと考えた。

運動有能感を高める工夫を考えていく中で、運動有能感の低い児童が活躍できる授業に着目しすぎると、これまで競争で勝つことができていた運動有能感の高い児童が負けてしまうことになったり、ゲームでの活躍が制限されてしまったりする可能性がある。つまり、運動有能感の高い児童の運動への参加意欲を低下させてしまうことが懸念される。これらのもともと運動有能感の高かった児童の運動有能感の向上が見られない原因として井上ら(2008)は「運動有能感の高い児童は得点が伸びにくいという天井効果が考えられることやルールを工夫することによる制限は活躍の場が制限され、もともと運動有能感の高かった児童は自らの運動能力の向上を実感する機会が少なくなるなど運動の楽しさを体験し、意欲的に取り組める場が確保されていないという可能性がある」と述べている。このように、運動有能感の低い児童の運動有能感を高める工夫が、運動有能感の高い児童の運動意欲や楽しさを低下させている可能性があり、運動意欲や楽しさの点を考慮した中で運動有能感を高めていく必要があると考える。すべての児童の運動に対する意識を高めるための工夫を凝らし、生涯にわたってスポーツライフを楽しむことができるきっかけ作りを支援できるような授業づくりを目指すことが必要である。「自己肯定意識」

岩永ら(2007)は、「子どもの教育をめぐる問題事情は自己肯定意識の低下が関係している」と指摘している。それは「達成感や自己を受け入れる態度、他者を受け入れる態度が欠如していることが要因である」と述べている。また、岩永ら(2008)は、「自己肯定意識が低下している現代の子どもたちは、自己と他者が傷つくことを恐れ、他者に対して防壁を築いており、希薄な関係に留まっている」と述べている。これらのことから、今を生きる子どもたちのコミュニケーション能力の低下や自らの気持ちを表現する力が低迷していることが考えられる。学習を通して他者との関わりから自他を認め合うことにより、自己肯定意識が高まり、他者との交流が促進され問題解決の手立てとなるのではないかと考える。私は体育科の授業にもこの交流の場を豊富に設けていきたい。子どもたち同士が、学習の様子を見合い、支え合うことでよさを

認め合うことができる環境づくりを進めていく。そのために、ペア学習やグループ学習を推進していき、アドバイスし合う時間を大切にしていける。また、価値づけることや成功体験を生むことができる支援をしていく。

「Action Socialization Experience(社会性を育成する実際体験)」

学校体育におけるチームスポーツの雰囲気に関する内容にも触れてみたい。金子(2010)は、「学校体育のバスケットボールの授業において、児童相互が積極的にコミュニケーションを取り合い、励ましの声、称賛の声を増やしチーム内の雰囲気をよりよくすることによって、技能の低い児童が積極的にボールに触れるようになる」ことを明らかにした。さらには、「試合中における児童の触球数の増加に伴い、技能の向上までも確認された」としている。チームスポーツにおいてチームワークや雰囲気、一体感といったものが結果に直結することはもちろんのこと、練習などの生産性に及ぼす影響は大きいと考える。これらのチームワークや雰囲気といったものを高めるための手法の一つとして「Action Socialization Experience(社会性を育成する実際体験)」などの野外教育活動が認められつつある。私はこのことがスポーツとレクリエーションの関係性と近いものがあるのではないかと考えている。橋本正一(1975)は「スポーツは、人間の基本的欲求に発する運動である。したがって、それは、何らかの意味における自己表現の活動である。また、レクリエーションは自由時間に行われる自発的活動であり、人間の基本的欲求を価値的に満足させる自己実現の活動である」と述べている。このことから、「スポーツは本質的にレクリエーションとしての基本条件を満たすものであり、両者は、内実と、実行枠の関係で考えている」としている。これらの手法や指導の方法を体育授業の導入に組み込み、教え合い活動や認め合う活動に生かすことができないかと考えている。

(2) 体育科における学ぶことへの関心・意欲を育てる指導方法の工夫

奈良教育研究所プロジェクト研究『学ぶことへの意欲・関心を高める指導』(2008)は「体育の授業は、教室での授業と違って運動場や体育館などの広い空間を使って行われる。したがって、移動や集合、用具の準備等に予想外の時間を費やすことになる。これらの時間が多くなると、必然的に学習(運動)する時間が減少する。子どもの精一杯運動したいという気持ちを満たし、どの子どもにも充実感や達成感を味わわせ、関心・意欲を高める指導を行うには以下のことに留意する必要がある」と述べている。

約束事を決める

用具の準備、準備運動、整理運動、後片付け、集合、整列などの基本的な活動については、子どもとの間で

約束事を決めておく。ただ、むやみに多くの約束事を決めないで、必要なものに絞って徹底することが大切である。また、約束事を教員の権威で維持しようとしても子どもの意欲にはつながらない。約束事が何を意味するのかをはっきりさせ、なぜそれを用いるのかを事前に説明し、理解させておく必要がある。

学習資料の活用

学習カードなどの学習資料は、子どもが円滑に学習を進めることを助けるものであり、意欲的な学習を促す重要な情報源である。その活用については、使用方法や活用の仕方を確実に伝え、理解させることが必要である。そうすることにより、学習をより活発にし、関心・意欲をもって学習内容を深めていくことができる。また、デジタルカメラやデジタルビデオなどのビジュアル機器を活用することによって、子どもたちの興味・関心を高めるとともに、視覚的に技術ポイントの確認をさせたり学習内容をフィードバックさせたりすることができる。

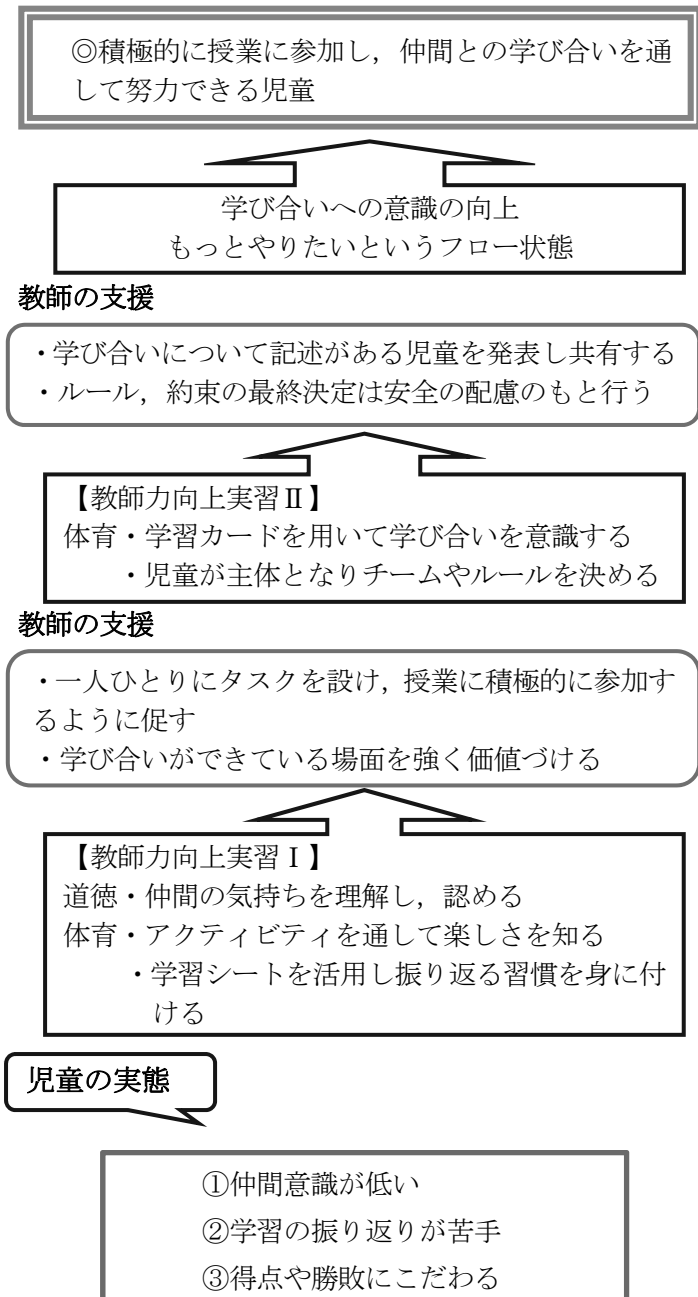
グルーピングの工夫

体育の授業では、グループで活動することが多い。その中で子どもたちは教え合ったり、励まし合ったりしながら学習を深めていく。もし、グループの人間関係が悪かったり、はじめから勝敗の結果が予想されるグループであったりすると学習意欲は高まらず、逆に低下してしまう。学級の間人間関係や授業のねらい、運動の特性や施設・用具の数量など様々な角度から考察し、慎重にグループづくりを行う必要がある。また、グループ内で一人ひとりが機能するようにすべてのメンバーに何らかの役割を設定することが望ましい。

3 研究の方法・手立て

体育の授業実践と道徳の授業実践を通して、児童たちが「子どもたちが学び合いを意識する楽しい授業づくり」を目指す。今回の教師力向上実習Ⅰと教師力向上実習Ⅱでは、奈良教育研究所プロジェクト研究『学ぶことへの意欲・関心を高める指導』(2008)の中で私が最も必要感を覚えた指導方法を参考に着手していく。私が行う授業の中では、得点や勝敗という数値や表面的な事象にではなく、仲間同士での関わり合いやアドバイス、チームを鼓舞するような発言、声掛けを常に認めていく。また、学習シートの朱書きにも上記のような記述があれば高く価値づける。結果、児童たちが意欲的に授業に取り組み、仲間との関わり合いを重視する→自尊心が高まる→学習意欲の向上→絶え間ない努力…と連続することを目指す。また、児童が自らの成長を実感できるように振り返りをワークシートに残し、自分自身の成長を見返すことができるようにさせる。

4 研究構想図



【図2 研究構想図】

本研究は、「積極的に授業に参加し、仲間との学び合いを通して努力できる」を目指す児童像とし、それに向けて、追究していく。【図2 研究構想図】は、教師力向上実習Ⅰでの主となる実践、それに関わる教師の支援、連続して教師力向上実習Ⅱへ移行し、それに伴う教師の支援を明記した。私自身が先行研究を基に特に力を入れた部分を取り出し、図におこしたものである。子どもたちの実態として、チームプレーであってもワンマンプレーが目立ち、単独で体育の授業に参加する姿勢が多く見られる。そして、運動能力の高い児童は数多く得点したり、勝利に貢献したりすること

で満足感を得ているように感じる。自分のチームが負けてしまったり、上手いかなかったりした時には、仲間に罵声を浴びせたり、途中で運動することを諦めたりしてしまう姿がある。また、体育の授業においては、特に学習したことが、後の学習に生かされていないように感じる場面がある。さらに運動能力の高い児童は体感として得たことや動きを体現することのみで仲間に教える際に動きを見せる事でしかアプローチできず、もどかしさを感じている。自分たちがその日に学んで、成長したことを言語化し振り返ることができていないことが原因の一つではないかと考えた。そこで、まず振り返ることに慣れさせ、学習シートに自分の思いや気持ちを書く活動を行わせた。同時に道徳の授業を用いて、学級の仲間の多様な意見に対して共感したり、批判的な思考をしたりして、仲間を認めることを重点的に指導した。また、学級の毎週の目標を意識させ、日々の自らの活動を改めて見つめ直し、改善に努める実践も行った。児童たちが一人ひとり授業や生活への取り組みを見つめ直すことができるようにさせるねらいがある。教師力向上実習Ⅱでは、教師力向上実習Ⅰでつけた力を基に学習カードに今日の学び合いMVPという欄を設け、得点や勝敗にこだわらず、互いを認め合い高め合おうとしている児童の双方の行動にスポットライトが当たるように着手した。この欄を学習シートの記述形式で設けることで、自然と児童の取り組みの中の見べきポイントや意識が学び合いに向かうと考えた。また、目標に向かって努力することの大切さを感じさせたい。体育では授業の楽しさを知り、どんな授業であっても仲間と協力することで困難を乗り越え、努力を惜しまないという、私が目指す児童像に近づける。

5 検証方法

(1) 授業づくり

ア 体育授業実践

- ① 実践前と実践後のアンケート項目ごとの比較を行い、それぞれの数値検討を行う。
- ② 学習シートの児童の記述から、児童の考え方や記述の質的变化を読み取る。
- ③ 最終アンケート実施の教師力向上実習ⅠとⅡの記述を比較し考察する。

イ 道徳授業実践

- ① 多様な考え方に気付き、仲間の意見に対して共感的思考や批判的思考を持つことができているかを

観察する。

- ② 学習シートの記述から自分なりの考え方や、仲間の意見を受けた記述ができていないかを読み取る。

(2) 学級づくり

ア 生活指導実践

- ① 日々の取り組みによる、目標に向かう子どもたちの言葉がけや姿勢を観察する。
 ② 帰りの会の後行う、週目標達成シートの記述と数値から変容を読み取る。

IV 体育実践の内容と考察

1 教師力向上実習 I の実践

(1) 実践の計画

平成 28 年 5 月 9 日 (月) ~ 6 月 3 日 (金)

実践対象：連携協力校 小学校，第 4 学年 1 組

34 名 (男子 16 名，女子 18 名)

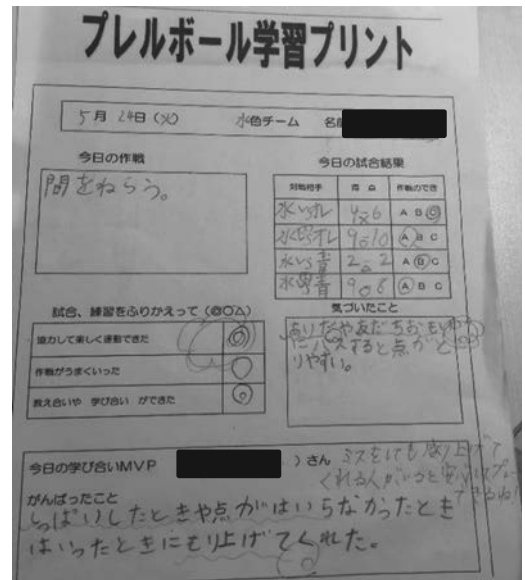
実践内容：体育授業実践 プレールボール

指導区分	学習内容
1	学習の内容を知り、計画を立てる。
2	基本技術である「投げる」「パスする」「アタックする」の技術を身に付ける。
3	集団的技術、個人的技術の習得を目指すとともに試しのゲームを行いプレールボールの楽しさを味わう。
4	リーグ戦を行いプレールボールの持つ楽しさや喜びを味わうと共に、チームや個人の課題や良さを理解し価値づける。チーム練習、リーグ戦の反省や評価を行う。
5	チームに別れて基本技術の習得を目指し、工夫した練習を行う。
6	チームに別れて課題に沿った練習や良いところをより一層伸ばす練習を行う。

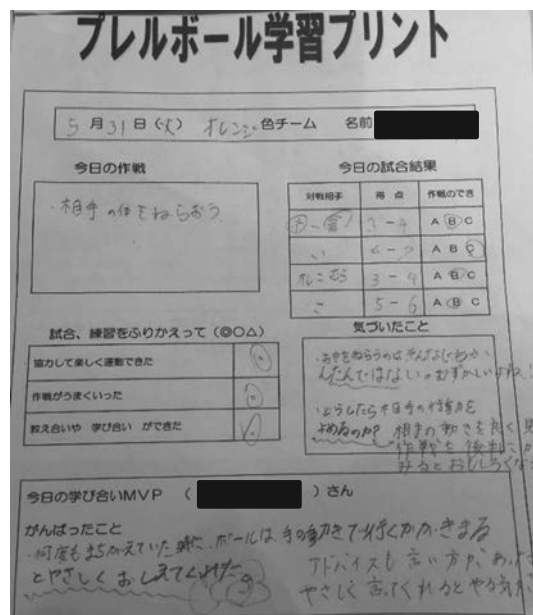
【表 1 教師力向上実習 I 体育科授業実践計画】

(2) 実践の成果と課題

体育の授業実践を通して子どもたちの技能やチームワークの向上から、一人ひとりの学習意欲や自尊心を高める授業づくりを追究した。体育の授業では、ニュースポーツである「プレールボール」を実践した。子どもたちの能力差があまり見られない実態を1時間目で把握し、もとの運動能力や所属する部活によってチーム分けを行った。毎時間の導入ではアクティビティを行い、楽しんで取り組むことができる授業内容に加え、ゲームを意識した学習の場面では点を多くとるための工夫やチームワークによる集団性や協調性を高めることができるよう作戦タイムを設定した。リーグ戦を行うことで高まり、児童から発せられる「どんまい!」「次がんばろう!」の言葉の数や学習シートの今日の学び合い MVP の記述から、仲間との関わり合いが少しずつ向上傾向にあることを感じることができた。



【児童 A プレールボール学習シート資料①】



【児童 B プレールボール学習シート資料②】

今日の学び合い MVP では、資料①からも②からもチーム内の仲間の行いに対しての記述を見ることができ、関わり合いに対する意識や授業に対しての意欲の高まりを感じた。また、授業実践の前後にアンケート調査を行った。否定的な値が1、肯定的な値が5の5段階で項目に対して評価してもらった。結果を相当する人数で割り、検出した。アンケートの結果から低い水準だった子どもが単元の初めに比べ、自己を肯定する意識が向上した結果を数値として得ることができ、自尊感情の高まりに有効性を感じることができた。その中でも変化が著しかったものを取り上げた。

【アンケート結果による表】(各項目ポイントの平均)

内容	実践前	実践後
体育授業が好き	2.8	3.7
体育授業で活躍したいと思う	2.0	2.2
仲間に頼りにされていると思う	2.16	2.24

私は大きく三つの課題を感じた。

- 1 チームメイト、仲間に対しての不満
- 2 設定した一律のルールに対しての不満
- 3 体育授業に対する意欲の差

これらは私が感じた事であり、学習シートに記述があったわけではない。しかし授業の終盤や試合中に上手くいかない時、マイナスな言葉をもらす児童を見かける。このことを改善することができれば学び合いの質は向上し、体育授業に対してプラスイメージを持ち、積極的に授業に参加し、努力できる児童、楽しい体育授業に近づける事ができると考えた。教師力向上実習Ⅱではこの三つに重点を置き、子どもたちの変容を捉えることにした。

2 教師力向上実習Ⅱの実践

(1) 実践の計画

平成28年9月26日(月)～10月21日(金)

実践対象：連携協力校 小学校、第4学年1組

34名(男子16名、女子18名)

実践内容：体育授業実践 ポートボール

指導区分	学習内容
1	<p>学習の内容を知り、学習の計画を立てる。体育の授業の約束事を丁寧に確認する。</p> <p>・能力に配慮して4チームの編成を自分たちで行う。(全員にアンケートをとり、最終決定は教師が編成)</p> <p>・リーダーを設定し各係などの役割を決める。</p>
2	<p>基本的な技術である「シュート」</p> <p>・ポートボールの基本的なルールを学ぶ。</p>
3	<p>「パス」の技術を身に付ける。</p> <p>・特別なルールは自分たちで困ったときに決める。</p>
4	<p>・チームに分かれて、「シュート」「パス」の基本的な技術を身に付けるための練習を行う。</p>

5	<p>集団的技術、個人的技術の習得を目指すとともに試しのゲームを行いポートボールの楽しさを味わう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・チームに分かれて基本的な技術の習得をめざし工夫した練習を行う。 ・「ドリブル」の要素を子どもたちの実態によって加える。 ・2つのコートの練習時間を用いてチーム内で分かれて行うミニゲームやチーム同士での練習試合を行う。
8	<p>トーナメント戦を行いポートボールの持つ楽しさや喜びを味わうと共に、チームや個人の課題や良さを理解し価値づける。チーム練習、トーナメント戦の反省を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・チームに分かれて課題に沿った練習や良いところをより一層伸ばす練習を行う。 ・事故や危険なプレーを防ぐため審判に赤い旗を持たせ、何かあれば振って知らせるようにし、安全に配慮して試合を進めるようにする。 ・チームや個人での反省、課題解決ができていないかを考えさせ、学習カードに記入する。

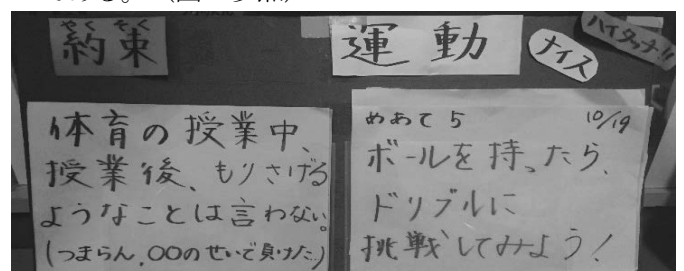
【表3 教師力向上実習Ⅱ 体育科授業実践計画】

(2) 実践の成果と課題

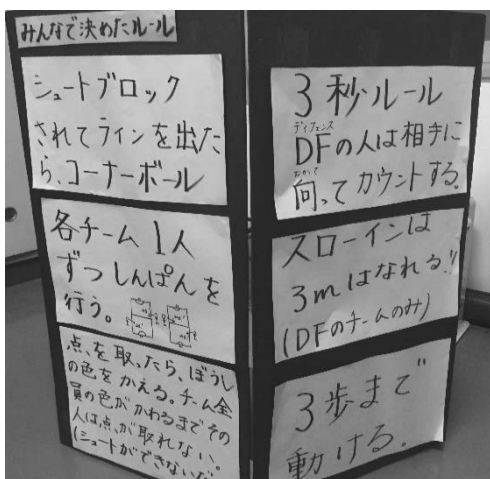
教師力向上実習Ⅱでは教師力向上Ⅰで私自身が感じた三つの課題を改善し、学び合いの質の向上、継続を図ることを目指した。

まずは、チームの仲間に対する不満である。これについては、単元の第一回の授業の後、児童全員に『誰とチームを組みたいか男子三人、女子三人』を明記させ、調査を行った。それを参考にしてチームを組んだ。しかしこれは、子どもから見た、能力の差や友人関係を知るためのものであり、結果的には私が編成した。そして、設定した一律のルールに対しての不満である。毎時間の体育の授業の終わりに、ルールや授業の進め方について意見のある児童がいれば全員で改善を行い学級全員で決めていくことにした。(図4参照)

最後に体育授業に対する意欲の差の軽減である。授業の冒頭の部分で必ず大きな声で約束を二つ復唱させた。実際に約束を守らない児童に対しては厳しく指導した。もう一つの約束は準備運動を真剣にやらない場合はポートボールの授業に参加できない。という二つである。(図3参照)



【図3 ポートボール約束ボード】



【図4 ポートボールルールボード】

これらの成果については、事後に行ったアンケートの記述にて報告する。

ポートボール学習プリント

10月17日(月) 色チーム 名前 []

今日の作戦: ホールをきちんとキャッチしてゴールに入れよう。

今日の試合結果:

対戦相手	得点	作戦の成否
初学	0-0	A/B/C
後学	1-1	A/B/C
初学	-	A/B/C
後学	-	A/B/C

試合、練習をふりかえって(190A)

楽しかったか? 楽しかった

作戦がうまくいったか? 作戦がうまくいった

教え合いや学び合いができたか? できた

気づいたこと: みんな考えてホールにボールをいれようから、ボールをいれように行ったら、みんなが楽しかった。

今日の学びMVP ()さん: ホールをいれる時にみんながうまくいかなかった時、よくよく動いてたところ良かった。自分自身もよく動けた。

今日の自分の振り返り: 相手のボールをいれようとして、ボールをいれようとした時、ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。

自己評価 ()点(10段階): 4点

【児童B ポートボール学習シート資料③】

ポートボール学習プリント

10月17日(月) 色チーム 名前 []

今日の作戦: ドリブルをしよう。

今日の試合結果:

対戦相手	得点	作戦の成否
初学	0-3	A/B/C
後学	0-3	A/B/C
初学	-	A/B/C
後学	-	A/B/C

試合、練習をふりかえって(190A)

楽しかったか? 楽しかった

作戦がうまくいったか? 作戦がうまくいった

教え合いや学び合いができたか? できた

気づいたこと: すごくいい人は、ボールをいれようとした時、ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。

今日の学びMVP ()さん: ホールをいれようとした時、ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。

今日の自分の振り返り: ホールをいれようとした時、ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。ボールをいれようとした。

自己評価 ()点(10段階): 4点

【児童C ポートボール学習シート資料④】

ポートボールの実践から学習シートの欄に学び合いMVPの理由を明記するように変化させた。そして写真の右下にある自己評価の欄には10段階で数値を示すようにした。資料③から仲間が上手くいかない時にある児童が積極的な動きをしたこと、資料④から、得点することができない児童Cに対し、「ゴールマンの近くに行ってみて！パスするから」と仲間に声をかけてもらったことに対して児童Cの嬉しかった気持ちが記録されていた。自己評価の欄は単元を追うごとに上昇傾向にあり、全9時間の最終回には7点以上と記入する児童が8割を超え、自分自身の評価の数値が極めて高く、体育の授業やポートボールの種目に対し意欲的に取り組んでいたと言えると考えた。

1. 今回のポートボールと前回のプレルボールではどちらが楽しかったですか。どちらかに○をつけてください。

ポートボール プレルボール

どうしてそう思ったのですか。理由を書いてください。

プレルボールより動きがなくていろいろな役もできて楽しくなかった。最初はぜんぜん上手でなくて、チームの上の子をみていたけど、だんだんボールをとれるようになって、ついに投げられたり、点をとれなくても仲間ががんばってと言ってくれたから。

【実践後比較児童アンケート記述資料⑤】

ポートボール プレルボール

どうしてそう思ったのですか。理由を書いてください。

ポートボールは、ルールとチームを自分たちで決めたから。いせにも、しんぱんを作ったから。アドバイスや、応援もしてくれただから、楽しくなって、他の人にも、みんなにアドバイスして、バスケットみたいで楽しかった。

【実践後比較児童アンケート記述資料⑥】

教師力向上実習Ⅰのプレルボールの実践、そして教師力向上実習Ⅱのポートボールを比較してどちらが楽しかったのか、その理由も明記できるアンケートをすべての実践を終えた後に取った。学級の34人の児童の中で実際に参加した32人から結果を考察した。アンケートと調査から81%の児童がポートボールと答えた。その理由を児童の記述を見ると以下のような回答が大半を占めた。

- ・仲間の「がんばって」の言葉があった
- ・自分たちでチーム、ルールを決めることができた
- ・運動量が多くあった

最初に自分自身で考えて記した数直線上の黒丸の位置から、仲間の意見を聞いた後、自分の気持ちを見つめ直し、赤の丸で再び記すという授業展開を取り入れた。二つの資料から気持ちに変動があったことを読み取ることができる。2人だけに限らず、7割以上の児童が最初の位置から異なる位置に記し直すことを行った。中にはそのままの位置で変わらない位置に記す児童もいた。しかし、そこには確かな理由が必要である。どうしてその位置なのかやなぜ移動させたのか。この部分が言える児童は高水準の道徳的価値を見出したのではないかと考えた。また、私のねらいである、多様な考え方を享受し、それらを生かしながら自分の気持ちを見つめ直すという部分にも近づくことができたとも言えるのではないだろうか。

Ⅶ 研究のまとめ

1 研究の成果

教師力向上実習ⅠとⅡを通して「子どもたちが学び合いを意識する楽しい授業づくり」について研究を進め、学び合いの大切さを追究し続けた。どんな教科であろうと、関わり合うことで、多様な考え方に出会い、気持ちは変容する。この連鎖の重要性に気付くことができたことは私自身の大きな成果でもある。それは最後に行った子どもたちの記述が確かな裏付けとなった。「仲良くなかった子と仲良くなれた」「協力することが楽しかった」これらは一人ではできない。子ども同士がかかわることで成立する学び合いだと言えると感じた。

2 研究の課題

実践的研究における課題は以下の2点である。

一つ目は、「学び合いの明確化」。教師力向上実習では関わり合うこと自体を学び合いとしていた。学び合うためには両者にメリットが必要である。「関わり合い」と「学び合い」は異なる。児童同士で行われているやり取りは片側が教えられているだけに留まっている場面がある。関わり合いの質や意図を見極め、支援していくことが必要なことであると感じた。

二つ目は、「学び合いによる質の保障」である。学び合いにも高水準のものとそうでないものがある。多様な考え方を持つ児童同士をかかわらせ、世界観を拡大させるきっかけを作ったり、似た意見を持った児童同士をかかわらせ、意見に説得性を持たせ強固なものにする機会を構築したりしたい。学び合う児童の様子や内容を教師が丁寧に把握し、理解して活動させることが必要であると感じた。

Ⅸ おわりに

教職大学院での2年間は、机上の空論ではなく現場に出て行き、実習を通して児童と関わり合いながら実践的に学ぶことができた。さまざまな経験をする中で自身の教師力向上を図ることができた。4月からは、教師として教壇に立つ。児童と関わり合いながら確か

な学び合いについてさらに深め、自分自身も一層成長していき、子どもたちの成長の支えとなる強い決意である。

【主な参考引用文献】

- ・中央教育審議会 初等中等教育分科会『学習指導要領改訂の基本的な考え方』
- ・文部科学省『小学校学習指導要領 保健体育編』及び『中学校学習指導要領 保健体育編』及び『小学校学習指導要領 道徳編』（実教出版、2008）
- ・桜井茂男『学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる』（誠信書房、1997）
- ・奈良教育研究所 プロジェクト研究『学ぶことへの意欲・関心を高める指導』（2008）
- ・岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎『運動有能感の構造とその発達および性差に関する研究』（教育学研究、1996、16(2)、pp145-155）
- ・杉原隆『生涯スポーツの心理学』（福村出版、2011、pp123-125）
- ・岩永定・佐伯智子・藤岡恭子・芝山明義・橋本洋治『宮城県におけるプロジェクト・アドベンチャーの取り組みと課題—子どもの自己肯定意識の育成に着目して』（鳴門教育大学研究紀要、2007、22：pp37-50）
- ・岩永定・藤岡恭子『市町村教育委員会関係者の学者連携事業に対する意識と課題—子どもの自己肯定意識の育成に着目して』（鳴門教育大学研究紀要、2008、23：pp63-73）
- ・金子優誠『チーム内の雰囲気と触球数との関わりに関する一考察』（教育実践研究、2010、第20集、pp.163-168）
- ・橋本正一『「体育学習（「運動/集団」学習）の指導』（1975、第一章 体育とは何か-考え方と構造 pp31）
- ・西川純『クラスがうまくいく「学び合い」ステップアップ』（学陽書房、2012）
- ・井上寛崇・岡澤祥訓・元塚敏彦『体育授業における運動有能感を高める工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究』（2008）
- ・岡澤祥訓・三上憲孝『体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係』（体育科教育 46（10）. 1998. pp.47-49）
- ・岡澤祥訓・諏訪祐一郎『「運動の楽しさ」と「運動有能感」との関係』（体育教育 46（12）. 1998. pp.44-46）

【付記】

教職大学院2年間を通して、「学校サポーター活動」「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」（常滑市立A小学校）、「教師力向上実習Ⅲ」（常滑市立B中学校）、「特別課題実習」（豊田市立C小学校）、「多様なフィールド実習」（天白子ネット）など学校及び職場で様々な活動や実習をさせていただきました。多くのご指導、ご助言をいただいたからこそ、有意義な時間を過ごすことができました。お世話になった全ての方々へ、心から感謝申し上げます。また、教職大学院在学中の2年間でお世話になった全ての先生方のご期待に応えられるように、今後も努力していく所存です。本当にありがとうございました。